

「子どもの本」委員会 日本ペンクラブ・国立国会図書館国際子ども図書館共催

## 「私が子ども時代に出会った本 5」——志茂田景樹

日本ペンクラブと国立国会図書館国際子ども図書館共催の「私が子ども時代に出会った本」の5

てこられた。志茂田さんは、なぜ読み聞かせを始めたか、そのきっかけから話し始める。

回目となる講演が、会員の志茂田景樹さんを講師に、4月16日（日）、上野の国際子ども図書館で行われた。志茂田さんは、毎年5月の連休に上野公園で行われる子どもの本のイベント「上野の森・親子フェスタ」で、15年間連続で読み聞かせをされ、大震災後も被災地で読み聞かせをするなど、子どもを対象にした読書推進活動に長年かかわっ

出版界は戦後ずっと右肩上がりで成長してきたが、1996年が頂点でそれ以後はずっと下降気味だ。そのちょうど転機になる1996年に、志茂田さんはK I B A BOOKSという出版社を立ち上げた。好きな本を出版したいと思ったのと、世の中に埋もれている素晴らしい才能を発見して世に送り出せたら素晴らしいの思いからだ。そし



志茂田景樹氏

て、できたばかりの小さな出版社の存在を知って  
もらおうと、全国の書店を回ってサイン会などを  
行った。大きな書店がショッピングモールなどに  
入り始めた時期で、書店でサインしていると何事  
が始まったのかと子どもを連れた母親がやって來  
る。その光景を見ていたら、幼い頃によく読み聞  
かせをしてもらった母の声がよみがえってきたと  
いう。

それで、書店に来る親子連れに向けて、  
1996年に初めて子どもの本の読み聞かせを始  
める。98年には奥様と一緒に「良い子に読み聞か

せ隊」を結成して志茂田さんが隊長になり、以来  
全国各地で読み聞かせを続けてきている。

1歳のときから読み聞かせをしてもらっていた  
という志茂田さんが、いちばん心に残っているの  
は、アンデルセンの『赤い靴』の絵本。靴から足  
が離れなくなつて切斷するという残酷で怖いお話  
だが、心地よい記憶として残っているのは、お母  
さんの優しい声とともに3歳の子どもの心に清々  
しく浄化されたから。15歳年上の兄を先頭に兄妹  
が多かったので、お母さんは食事の準備も大変で、  
「あなたに本を読んでやるとすやすやと寝てくれ  
たから、夕食の支度ができた」とお母さんから後  
に聞いたという。それもあつただろうが、長兄が  
いつ戦争に取られやしないかと、ストレスをい  
っぱいためていた母親が、声を出して幼い息子に  
本を読むことで、ストレス解消になっていたのか  
もしれない。『カチカチ山』や『舌切り雀』も読  
んでもらっていたと思うけど、『赤い靴』が、ぼ  
くにとつては本との出会いの原点だと言つてもい  
い、と志茂田さんは語る。

小学校に入ると、むさぼるように本を読んだ。  
と言つても小学4年生まで図書館もない分校だっ  
たから、戦後間もない頃に出版された本が、みか  
ん箱を本棚かわりにして詰めてあつた程度。そう  
いう中でひかれたのが『トム・ソーヤの冒険』や  
『十五少年漂流記』などの冒険ものが好きだった。  
中学生になると、父親の本棚にあつた本を端から

読んだという。その頃に出会つた本でいちばん印  
象に残っているのが、岩波文庫のニコライ・バイ  
コフの『偉大なる王』だった。志茂田さんの直木  
賞受賞作『黄色い牙』には、知らず知らずのうち  
に『偉大なる王』が影響しているのかもしれない  
という。子どものころの読書体験というのは、本  
当に偉大だ、と志茂田さんは力説した。

子どもの頃の読書は、量の問題でもないし、良  
書ばかりを読む必要もない。臭いものにふたをし  
たら、いいものを見る眼も育たない。読書の好き  
な子は、悪書も読みながら読む力やいい本を見つ  
ける力をつけてくるので、無菌状態で育ててはよ  
くない。子どもの直観力を信頼して本を選ばせて  
読ませるのが望ましい。子どもにとつて読書は、  
宝の遊びであり、貴重な仕事だ、と志茂田さんは  
語つた。

足の調子が良くないとおつしやりながらも、2  
時間近くを立ちっぱなし。終戦間際に出征し、戦  
死されたお兄さんのお話などもはさみ、途中でご  
自身の絵本『ぞうのこどもがみたゆめ』の場面を  
奥様がスクリーンに投影しながら、志茂田さんが  
読み聞かせするなど、身振り手振りを交えての熱  
演に会場は沸き返つた。終了後、感激のあまり図  
書館の入り口で待っていて、志茂田さんにお礼の  
握手を求める人もいたくらい、聴衆の皆さんの心  
に沁みる素晴らしい講演会だった。

まとめ・写真Ⅱ「子どもの本」委員長 野上暁